

腰部脊柱管狭窄による腰下肢症状に対する仙骨部鍼通電刺激の効果

井上 基浩, 今枝 美和

臨床鍼灸学講座

【目的】腰下肢症状に対する第2選択の治療である陰部神経鍼通電は、効果は高いがデメリットとして、施術にかかる時間的要因、そして受療時の不快感があげられる。そこで、第1選択よりも効果を期待でき、陰部神経鍼通電の前に行える不快感の少ない、より簡便な治療法として仙骨部鍼通電刺激を考案し、その効果を観察した。

【方法】対象：8回（1回／週）の第1選択的鍼治療が無効であった脊柱管狭窄症患者12名 施術方法：障害側の仙骨後面の筋部に鍼を2本刺入し、低周波鍼通電刺激を4回（1回／週）行った。評価：第1選択的鍼治療前、仙骨部鍼通電刺激前・後に、腰痛、下肢痛、下肢異常感覚はVAS、加えて、QOL評価として、RDQを用いた。連続歩行可能距離は自己申告により確認した。

【結果】仙骨部鍼通電刺激前・後で、腰痛以外は有意な改善を示した（ $p<0.05$ ）。RDQ、連続歩行可能距離も有意な改善を示した（ $p<0.05$ ）。

【考察】第1選択的鍼治療の無効例に対して有意な改善を示したことから、仙骨部鍼通電は有効な治療法になり得ると考えた。効果発現機序として、仙骨後面の鍼通電刺激が脊髄神経後枝を刺激することにより、痛みの抑制系を賦活させるとともに、脊椎周囲の神経支配の関係から前枝（坐骨神経、陰部神経）、脊椎洞神経に影響し、神経血流の変動等を与えた可能性を考えた。

頸肩部痛に対する鍼治療効果に関する検討 —鍼の刺入深度に着目したランダム化比較試験—

今枝 美和, 井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【目的】同一部位における鍼の刺入深度の違いによる臨床効果の相違について、ランダム化比較試験により検討した。

【方法】頸肩部痛を有する患者26名を無作為に、表在へのみ鍼を刺入する浅刺群（ $n=13$ ）と深部まで刺入する深刺群（ $n=13$ ）の2群に割り付けた。両群ともに頸肩部の自覚的最大痛み部位（最大10ヵ所）を施術部位とした。刺入深度は、浅刺群は約5mm、深刺群は15～20mmとして、雀啄術（2Hz, 20sec）を行った後、抜鍼した。全ての患者に対して計4回（1回／週）施行した。各回の治療前後、治療終了4週経過時に、痛みのVisual Analogue Scale（VAS）を記録し、初回治療前、4回目の治療終了時、治療終了4週経過時にはNeck Disability Index（NDI）による評価を行った。

【結果】VAS、NDIの経時的変化パターンに関して、深刺群で有意な改善を示した（VAS、NDIともに $p<0.001$ ）。また、VASに関しては治療終了時および治療終了4週経過時の各時点における初回治療前に対する変化量について深刺群で有意に良好な結果を示し（治療終了時、治療終了4週経過時ともに $p<0.05$ ）、NDIに関しても深刺群で良好な傾向を示した（治療終了時、治療終了4週経過時ともに $p=0.05$ ）。

【考察】本研究の結果から、鍼の刺入深度の相違は頸肩部痛に対して異なる影響を与える可能性が高く、効果的な治療法を考える上で重要な因子の1つであると考えた。